

【日田市受託研究】 『広瀬旭荘日記 「日間瑣事備忘」に関する歴史地理的研究』

中山昭則

Akinori NAKAYAMA

筆者は2012（平成24）年8月に日田市教育委員会から受けた標記受託研究を行っている。長兄の広瀬淡窓は生涯日田を中心に暮らしたが、旭荘は大阪を生活の拠点として全国をくまなく旅している。さらにその様子を克明に日記（「日間瑣事備忘」）に書き記している。そこで、日田市教育委員会は旭荘の足取りを辿り、その足跡を復元することを目的とした研究を筆者に委託してきたものである。

旭荘の日記はほぼ全編にわたり漢文で記されている。市はまず原文を現代文に書き下ろす作業から始めている。その作業が順次仕上がり次第筆者のもとに送られ、それを地図上に落とし分析する。その漢文の書き下ろし作業は難航している。初年度は年表から彼の足跡を日本地図上に描いた。

旭荘は幕末期に漢詩学者として活躍し、大阪では緒方洪庵ら著名人とも人脈を結んでいた。彼が滞在した島根県出雲市や岡山県津山市では、既に旭荘の足取りを詳細に調査した報告書および書籍を刊行している。筆者と日田市教育委員会は岡山県津山市が旭荘研究で先行していると位置づけ、2013（平成25）年3月に現地調査を実施した。

旭荘は津山市にはおよそ1か月以上滞在し、此处での行動を克明に記録している。2012年度の調査はその足跡を辿った。幸い津山市内には当時の記録そのままの風景も随所にみられ、彼を偲ぶには絶好の調査旅行であった。また、周辺の奥津温泉や加茂町も訪ね、当時そのままの景観を確認できた。さらに、旭荘は津山市刊行の書籍は大阪から津山に至る道中も詳細に書き記している。その足跡を辿り兵庫県佐用町から津山に至る道中の記録を辿ってみた。ここでも書き記してある一里塚や樹木を確認することができた。加えて詳細に記している当時の景色と今日の変容ぶりも認識することができた。

2013年度は旭荘が日田市と大阪を往来する際に頻繁に通った瀬戸内地方を訪ねた。彼が使った主な瀬戸内海ルートは、下関から山口県上関・広島県呉市御手洗・福山市鞆の浦・香川県善通寺を経由するものである。その他福山市からは陸路旧山陽道（現国道486号）に沿って岡山県井原市矢掛地区から倉敷市に抜けるルートも利用することがあった。その他に回数は少ないが日田から中津・宇佐を経由し国東半島の竹田津から船出をしたこともあった。

2013年度の調査旅行では、とりわけ広島県呉



写真1 旭荘も利用していたであろうか？
船溜まり付近（2014.3.9 御手洗町並み資料館
筆者撮影）



写真2 石垣の下半分は当時のものである（2014.3.9）



写真3 赤間宮前の船着き場跡、対岸は門司（2014.9.10）

市御手洗地区において彼の記述に沿う景観が確認できた。御手洗は瀬戸内航路の交易の中継地および“風待ち港”として古くから賑わっていた。旭荘も幾度となく訪れている。

2013年度はこのほか大分県内の足跡を辿ることを試みた。日田市から玖珠町に至るルートを追ったのだが、既に廃道になっていた場所もあり、不明な個所が随所で見つかり全容は明らかにできなかった。

2014年度は旭荘日記の書下ろしがかなり出来る予定であったが、日田市側の都合により思うように進まず、当初の計画通りには行かなかった。そこで9月10日に旭荘が大阪との往來のために頻繁に訪ねた下関市を訪ね、彼の足跡を辿ることにした。調査は主に瀬戸内航路の出発点としていた赤間宮周辺を中心に足跡を辿った。記録によれば定宿としていた船宿などの話が頻繁に出てくるのであるが、残念ながらその場所を特定することは出来なかった。さらに旭荘の記述によると、下関と大里（門司）を結ぶ関門海峡の航路は、公式な定期船（渡し船）の他に、船宿が運行する私設の渡し船も頻発していたという。旭荘は主に後者を利用していたようだ。

また、2015年2月には昨年度の調査の延長として、岡山市から神戸市そして大阪市を訪ね彼の足跡を巡る予定である。これまで述べた調査旅行には「旅と地域の研究会」の学生も参加している。

さらに、今年度は「旭荘の旅にみる当時の旅すがた（仮題）」と称した成果品を作成している。詳細な記録から浮かび上がる当時の旅の姿をイラストで描く予定である。イラストは大学

院文化財学研究科修了生に手がけてもらい、その素案は「旅と地域の研究会」の学生が手がけている。

今後は、これまでの調査と分析をもとに報告書にまとめる予定である。これは2015年度の作業となる。